

中での範例の機能・効果という面から検討した。この他に、考察への全般的視点として、範例が説得力を有するのは、単純に語り手側の神話に関する知識に依存するのでなく、神話の中にある説得に適切な要素を聞き手に想起させることによる、ということに注目した。このことは、一方で、聞き手の側が自分のよく知っている（と思っている）神話について目前の問題との関連であらたまった意味づけを知らされる、というソクラテスのアイロニーにも似た側面をもつ。他方、神話が本来的に口承伝統である、つまり、神話の存続は語ることを通じてのみ保たれ、その語りの場では語り手と聞き手が想起を繰り返す、ということを考えるとき、この特性が範例の構造の中に取り込まれていることが見て取れる。

B01 西洋古典文献の伝承史と中世東西地中海世界の修道制をめぐる実証的研究

研究代表者 秋山 学
筑波大学文芸言語学系 講師
研究分担者 桑原 直己
筑波大学哲学思想系 助教授

1999年度には、本科研の成果としてまず下記4点の論考を公にすることができた。1)「バシレイオスと「ルネッサンス」～神学と人文主義の関係をめぐって～」（『地中海学研究』XXII, 65～86頁, 1999年）。2)「Vergilius, Aeneis VI, 601～622」（『エポス』第18号, 木魂社, 66～73頁）。3)「ヘシオドス『神統記』における詩人の召命～預言者と自然啓示～」（筑波大学文芸・言語学系紀要『文芸言語研究』文芸篇36号, 1～16頁, 1999年）。4)「聖域としての悲劇」（同上37号, 71～88頁, 2000年）。その他に訳注研究の成果として、いずれも部分訳ながら、5)D.デ・ソト『正義と法について』6)M.カノ『神学的典拠について』7)R.ペラルミーノ『被造物の階梯による神への精神の飛翔』8)J.デ・マリアナ『王と王の教育について』（5）～8）はいずれも平凡社刊『中世思想原典集成』20『近世のスコラ学』近刊に所収）を完成させることができた。

上記諸成果のうち本題目に大きく関係するのは1)および5)～8)である。まず1)においては、総じて現存する西洋古典文献の最古の手写本が成立した9世紀ごろにおける、地中海東西の写字修道士たちの精神的地平を、ギリシャ教父神学および初期修道制にまで遡って解明することを目指した。結論としては、修道制の父祖的

存在であるバシレイオス像が、その弟であるニュッサのグレゴリオスによる位置づけを通じて旧約のモーセに比せられるものとなり、総じて写字行為を、モーセによる律法授受に似た地平において成立させる可能性を披いたこと、また「出エジプトの原則」に則り、異教文化の積極的摂取へと向かわせたことを明らかにした。また5)～8)は、いずれも16～17世紀ルネッサンス期の神学者たちの原典訳と解説であるが、彼らが古典文献と教父神学に立脚して反対宗教改革期の神学を樹立したということ、解説・訳注において指摘できたと考える。

B02 「伝承と受容(日本)」

B02 近代日本における西洋古典文化の受容と教養分化の変容に関する歴史社会学的研究

研究代表者 筒井 清忠
京都大学大学院文学研究科 教授
研究分担者 田中 紀行
京都大学大学院文学研究科 助教授

本研究では、近代日本における西洋文化の一連の受容過程のなかで、文学・思想の特定の著作が古典として選択的に受け入れられ、日本人の教養文化を変容させていった過程を、主に社会的・制度的側面から解明することをめざしている。今年度は、近代日本の出版文化や高等教育などに関わる資料の収集を進めながら、思想史・文学史・メディア史・教育史・比較文学など関連諸分野における先行研究および社会学的分析視角の検討を主に行なった。

研究はまだ継続中であるため、まとまった研究成果が披露できる段階ではないが、暫定的に次のようなことは言えそうである。日本の「古典」の制度化過程においては学校教育制度（特に中等教育のカリキュラム）が中心的機能を果たしたのに対して、西洋の「古典」の受容過程においてはむしろ古典の翻訳・出版が最も基本的な要因であった。とりわけ、当初刊行点数の3分の1以上を西洋文学の古典に充てていた岩波文庫（1927年刊行開始）は、これ以降の読書人の必読書目の選別において中心的な役割を果たした。昭和初期の出版市場の拡大によって、当初は外国語の知識のある学歴エリートにほぼ独占されていた西洋の言語文化が、知的中間層の正統的階層文化に組み込まれていったと考えられる。

なお、今年度は大正期から昭和初期を中心に研究した

こともあって、日本の知識人文化における国学・漢学と西洋文化の相対的位置関係の解明というテーマには着手できていない。これは来年度の課題としたい。

B02 禅林聯句に関する基礎的研究

研究代表者 朝倉 尚
広島大学総合科学部 教授

実施計画書に添って、東京・足利市・京都方面に、資料調査、収集のために出張し、禅林聯句(集)の所在を確認し、その一部については複写、写真撮影を行った。

収集済みの資料のうち、特に「江東避乱聯句」(仮称)については、三十巻三千句というまとまりを有した作品集として処遇し、その本格的な調査に着手した。聯句の興行自体は、応仁の大乱が勃発した応仁元年(1467)八月より翌二年四月にかけて、主として横川景三、桃源瑞仙、景徐周麟などが、避乱地である近江国山上の永源寺を中心にして行われた。この「江東避乱聯句」を対象とする研究が有効であるのは、戦乱下の文芸ということもさることながら、聯句集「東遊集」として成立した直後に、各句に解説を加えた「抄物」としても存在することである。

そこで、抄物としての作品集『湯山聯句』(大谷大学図書館所蔵)と『成吠詩集』(龍谷大学図書館所蔵)の読解の第一歩としては、本文の固定化が必要となる。抄物の翻字に適した原稿用紙を用意して、両集を翻字し、第一次草稿を作成した。次いで、足利学校遺蹟図書館所蔵『聯句集』にも、同聯句に対する抄物が含まれるために、校合を鋭意準備中である。

なお、本年度の成果の一部については、「戦乱の文芸としての禅林聯句 「小補東遊集」と「江東避乱聯句」(仮称) 」(『國語と國文学』第76巻第1号)、「戦乱における禅林の文芸 応仁の大乱をめぐる一禅僧(横川景三)の軌跡 」(『中世文学研究』第25号)、「景徐周麟の文筆活動 延徳二年 」(『地域文化研究』第25巻)と題してまとめた、雑誌論文の一部としても公表した。

B02 「大航海時代の語学書」としてのキリシタン文献 インド・コンカニ語諸文献との対比を中心にして

研究代表者 丸山 徹
南山大学文学部 教授

「キリシタン文献」には少なくとも次の三つの角度から光を当ててみる必要がある。

- 1.(16・17世紀の)ラテン語・ポルトガル語語学書成立の背景
- 2.同時代のアフリカ・ブラジル・インド、そして日本における(ポルトガル語で書かれた)現地語文法書・辞書成立の背景
- 3.中世日本語の姿

本研究は、主として上記2の観点からの考察で、本年度はこれまでに下記のような成果を得た。

- ① コンカニ語キリスト教要理 Doutrina Christam em lingua Bramana Canarim (1622)全文の計算機への入力を終え、語形による検索が可能なる形をほぼ整える。
- ② ポルトガル国エヴォラ公立図書館における第一次文献調査(平成11年8月)の中で、コンカニ語・ポルトガル語語彙集写本(1626)のタイプ版(Pis-surlencar の手になる半世紀前のものか)を入手する。
- ③ 同語彙集原本(写本)のゼロックスコピーをミネソタ大学(Ames Library of South Asia)より入手、上記タイプ版と対照させながら、同語彙集写本の計算機入力を開始する。(来年度中に約14000の全語彙及びポルトガル語訳を含む同語彙集データベース作成を目差して作業中。) 以上

B02 平安時代物語文の比較計量的研究

研究代表者 大津 透
東京大学人文社会系研究科 教授

古代の天皇制をめぐる研究書をまとめ、律令法に規定された奈良時代の天皇のあり方は、実際には大化前代あるいは古墳時代以来の固有なあり方、氏姓制度のあり方を継承しているものであることを明らかにした。しかし当初継受できなかった中国的な律令法について、八世紀中葉以降、礼の受容による唐風化という形で天皇制の変化がすすみ、弘仁年間に儀礼が中国的な形に改められ、

貞観年間に唐風化の到達点を見る。これは八世紀以来律令制が段階的に継受されたということができ、天皇制は奈良時代にはなお濃厚に残っていた神話の秩序からようやく脱する。この日本の天皇制は江戸時代までつづく「古典的国制」であるが、その成立は唐の律令や礼の継受の結果であったことを解明した。

調査としては、中国寧波の天一閣で発見された北宋天聖令の写本の研究を進め、具体的な唐令の復原作業を進めた。また龍谷大学所蔵の大谷探検隊が西域より将来した大谷文書のうち、唐西州の退田文書、欠田文書、給田文書からなる一連の均田制関連文書について、精力的に復原研究を進め、多くの断簡接続を発見し、大谷文書の整理に貢献している。これにより唐律令制の土地支配・民衆支配が解明され、日本の田令との差異が明らかになるだろう。またソウル国立中央博物館所蔵の大谷探検隊将来アンペラ文書については、写真を入手し、接続を補訂し釈文を作成し、唐財政の一面を解明した。今後の原本調査を期待している。

B02 古代・中世の漢文訓読文資料の文体的研究

研究代表者 金水 敏
大阪大学大学院文学研究科 助教授

研究分担者 李 長波
京都大学大学院人間・環境学研究科 助手

李長波担当分の研究報告

漢訳仏典の文体的な性格をとらえるために、訳経史及び漢訳仏典の言語史的研究の基本文献を調査したこと。古代中国語の歴史文法と古代日本語との関わりを整理するための一例として、漢文訓読との関わりという観点から、「漢語「彼」と和語「かれ」の語史を整理したこと。その成果の一部は下記のとおり学会発表しました。

- 学会発表
「彼・かれ」の語史とその周辺 三人称代名詞の成立までのみちすじ」

- 第六十二回国語語彙史研究会
(1999年9月25日(土)於神戸女子大学)

近代における書き言葉の文体的な成立を明らかにするための基本文献を整備するために、幕末・明治初期の雑誌・新聞の出版と所蔵に関する調査を行ったこと、それから『明六雑誌』の本文批判に着手したこと。とりいそぎご報告のみにて失礼させていただきます。

金水担当分についての報告

1. 漢文訓読文関係論文目録の作成

漢文訓読文に関わる研究文献および影印・翻刻等の出版物の情報を収集した。現在整理中で、整理ができしだい、金水のホームページ上で公開する予定である。

2. 高山寺蔵「方便智院聖教目録」索引作成

金水は先に、高山寺蔵「方便智院聖教目録」の翻刻にあたった(高山寺典籍文書総合調査団(編)(1998)高山寺資料叢書第18冊『明恵上人資料第四』pp.387-473,東京大学出版会)。本目録は、高山寺所蔵の真言密教関係典籍の根幹をなす重要な目録で、漢文訓読文研究にとっても重要な基礎資料である。今回は、この目録に掲げられた典籍を見出しとし、典籍名の読みの50音順に配列した索引を作成した。この索引は『平成11年度高山寺典籍文書総合調査団 研究報告論集』に掲載予定である(2000年3月刊)。もともと、翻刻原稿はLaTeXファイルで入稿しているので、そこから典籍名を抽出し、典籍名の読み仮名等の情報を付加して索引作成用の基礎データベースとした。この基礎データベースは、近日中にやはり金水のホームページで公開する。

B02 古典和歌データベースにおける表現技法の歴史的研究

研究代表者 南里 一郎
純真女子短期大学 教授

研究分担者 竹田 正幸
九州大学大学院システム情報科学研究科 助教授

研究分担者 福田 智子
福岡女学院大学

本研究のねらいは、大量の和歌データから類似歌を抽出して、歌から歌への影響関係を発見し、表現技法の系譜を明らかにすることである。歌の影響関係というと、まず「本歌取り」の技法が想起されるが、藤原定家によって定義される以前の、多様な類似歌や影響歌も対象とする。類似歌の抽出にあたり、形態素解析などの自然言語処理は施さない。歌を単なる文字の連鎖とみなして、計算機プログラムにより計算可能な類似性指標を考案し、類似度の高い歌の対を文学的観点から評価するという手順をとる。

第1の類似性指標は、歌を句に分割し、句ごとに求めた類似度の総和を、歌と歌の間の類似度とするものである。この際、句の順序は問わない。また、句と句の間の

類似度は、共通する部分文字列の長さに基づいて与えた。この指標を用いて、任意の2つの歌集間において、類似歌の対の自動抽出を試みた。具体的には、『古今集』と、次の歌集とを比較した。

- (1) 『後撰集』以下『新古今集』に至る7つの勅撰集
- (2) 『新編国歌大観』第三巻所載の平安から鎌倉期にかけて成立した134の私家集

その結果、(1)では、これまで指摘されていなかった本歌を、新たに加えることができた。特に、藤原兼輔の代表歌「人の親の」の歌の本歌の発見は、当時の歌作の実際に迫る鍵として、本研究の今後の重要な指針となるであろう。また(2)では、『古今集』歌との類似度が、各々の私家集(個人歌集)によって異なっていることを、数値的に確認した。

また、第2の類似性指標は、先の手法の欠を補うという観点から、歌を句に分割せずに、共通する部分文字列を考えるものである。また、それら共通する文字列の出現頻度が低いほど、類似度が高くなるように設計した。すると、第1の指標による結果と大部分が重複する反面、注目すべき歌も浮上してきた。今後、これらの結果の総合的分析とともに、類似歌抽出方式のさらなる改良を行う予定である。

B02 中世における外国文化の受容と展開

研究代表者 木田 章義
京都大学大学院文学研究科 教授
研究分担者 鈴木 広光
九州大学文学部 講師

研究代表者は、本年度、朝鮮資料の資料整理と資料収集を中心に活動した。

朝鮮資料類は、浜田敦元教授の蔵書を整理し、関係資料を一括して購入することができ、朝鮮関係の図書が充実し、研究にも大いに役立った。また、京都大学附属図書館の河合文庫は朝鮮史料の大きなコレクションとして知られているが、まだ、簡単な目録があるだけであるため、利用が難しい状態にある。現在、この河合文庫の各本を一つ一つ確認して行く作業を行っている途中である。

研究分担者は、バレット写本の読解と注釈を中心しつつ、バレット写本をはじめとする、日本の聖書の受容の歴史について研究を続けている。現在のところバレット写本の元になった原典は突き止められていないが、ヨーロッパにおいても、エヴァンゲリアと呼ばれる、説教をする人々への、参考書があり、それらがバレット写本の元にな

ったのではないかと推論できる程度になり、その写本類の写真を収集しつつある。

研究代表者・分担者の研究分野では、歴史的な資料との関連も深く、文化史的な考察をする前に、資料の整理と収集が必要であるため、いわゆる基礎作業の途中で、本年度が終わったという状況である。

B02 中世における外国文化の受容と展開

研究代表者 木田 章義
京都大学大学院文学研究科 教授
報告者 鈴木 広光
九州大学文学部 講師

本年度は、イエズス会士マノエル・バレットによって筆写された福音書の日本語訳抜抄集の研究の基礎段階として、この資料が翻訳物であるという特質に鑑み、これと対照すべき欧文資料の探索を行なった。カトリックの聖書といえばヴルガタであるが、このラテン語聖句と必ずしも一致しない日本語訳聖句がバレット写本の中には散見される。これが日本のような布教地独自のものであるのか、それとも既にヨーロッパで行われていたものをそのままぞつたに過ぎないものなのかを確定するには、ヨーロッパでどのような福音書抄(*evangelia*)が行なわれていたのかを明らかにしなければならない。調査の結果、年代的にも地域的にも、日本のバレット写本福音書抄と何らかの関わりを持つのではないかと考えられる以下の二つの著作がピックアップされた。

(1) OROZCO, Alonso de Declamationes in omnes solennitates, quae in Festivis Sanctorum quotannis in Ecclesia Romana celebrantur, etc. Salmanticae, 1573.

(2) OROZCO, Alonso de Declamationes vigintiquinque in Evangelia, quae juxta ritum sanctae Romanae ecclesiae, etc. Salmanticae, 1571.

またバレット写本の成立以後に刊行されたものであるが、刊行地とそれに伴う普及度という観点から、下記の資料も比較の対象に加えることにした。

(3) LANGHECRUCIUS, Joannes Precationes in Epistolas, et Evangelia, Dominicis, Festis, Quadragesimae, ac Quatuor Temporum diebus in Missae sacrificio secundum novum usum Romanum legi solita. Antverpiae, 1601.

これらの資料の写真(マイクロ)が入手でき次第、バレット写本との比較対照作業に入る予定である。

B02 キリシタン文献の文化横断的研究

研究代表者 米井 力也
大阪外国語大学外国語学部 助教授

研究分担者 エンゲルベルト・ヨルッセン
京都大学総合人間学部 助教授

- 「キリシタンと王法・仏法」(『国文学』1999年7月号、特集・仏教、pp. 52-55、学燈社、1999年6月)
- 「書評：小島幸枝『キリシタン文献の国語学的研究』ほか」(『国語学』197、pp.34-40、国語学会、1999年6月)

B03 「近代社会と古典」

B03 現代社会における西洋古典学の継承 フランスにおける文学研究と文学史の成立

研究代表者 中川 久定
京都国立博物館 館長

「批評」の2分化 文献「批評」と文学「批評」

フランスでは、18世紀半ば頃から「批評 critique」という用語が、明確に異なる次の2つの意味に分化して使用されはじめてくる。第1が、古典古代のギリシア・ラテン語文献の本文確定作業、すなわち「本文校訂」という意味においてであり、第2が、文献の内容にかかわる「文学批評」という意味においてである。前者からは文献の歴史としての文学史が、後者からは学問としての「批評」、すなわち文学研究がそれぞれ生まれてくる。こうした大きな流れをディドロ『百科全書』に基づいて、たどっている。



B03 現代社会における西洋古典学の継承 フランスにおける文学研究と文学史の成立

研究分担者 多賀 茂
京都大学総合人間学部 助教授

以下の二つのテーマを平行して研究している。

1. 近代言語学さらには人文諸科学の源泉としての「文献学」と「語源学」

17世紀、18世紀のフランスにおいては普遍的言語が夢見られ、追究されたのと同時に、諸言語の歴史的研究も発展した。当時の進歩的な思想の基礎にあった歴史批評術、すなわち歴史的な事実の真偽を判定するための様々な方法と知識の総体は、その大半をそれぞれの国語の歴史的变化の研究に負っていたからである。そうした研究から、いかにして言語の歴史的变化の法則性など近代の人文科学につながる発想が生まれてきたのかをあとづけている。

2. 近代的図書館運営の先駆者としてのベネディクト派修道会

古典主義時代の図書館、あるいは蔵書は精選されたある限定された数の書物が、知の総体を代表できるという思想のもとで設計、収集、管理されていた。普通の個人的な蔵書のみならず、大貴族や修道院が持つ公開された図書館についても同様のことが言える。ところが歴史研究の専門家集団とも言えるベネディクト派修道会では図書の収集や管理、とりわけ情報の流通に関して非常に近代的な技術が早くから導入されていた。彼らにとって、図書は知を表象/代表するものであると同時に、歴史的事実に関する記録であった。いわば図書館の古文書館化を彼らは行っていたのであった。